

2005年2月

「コリーグ」38号 目次

巻頭言 (1~2) 第32回研究員集会報告 (3) COE プログラムの経緯 (3)
有本センター長のご退職によせて (4~6) 高等教育公開セミナー報告 (6)
新任者・離任者から一言 (7~10) センター滞在記 (11~12)
情報調査室だより (12)

■ 巻 頭 言



法制度「改革」から社会経済「政策」へ

矢野 眞和 (東京大学大学院教育学研究科教授)

ある私立大学で伺った話である。卒業の年を迎えて、単位不足の学生を呼び出したところ、「卒業できない、というのは心外だ」と反論されたという。理由はこうである。入学した折に、「大学の4年間には是非とも、一つのことに打ち込んでほしい」と教師に訓示されたとのことである。その学生は、素直にいろいろ考えた。そして、会計士の資格を取ろうと決めて頑張った。専門学校にも通い、何とか目的を達成した。「言われたとおりに、一つのことに打ち込んできた。にもかかわらず、卒業できないのはおかしい」というのである。

他の大学では、次のような学生の話も伺った。有名企業に就職するのはなかなか難しい大学だが、その学生は、二つの上場企業から内定をもらった。しかし、自分のやりたいことを決めてから会社を選びなさいと就職指導されてきた学生は、どちらの会社が、自分のやりたいことにふさわしい会社なのか、分かりかねた。分からないままに就職してはいけないと判断して、二つとも断った。「こんなに苦労して就職するのだから、決まった会社は理想的でなければならない」と発言する学生が少なくないという。

「働きすぎの若者とフリーターは、(仕事を重く考える同じ価値観をもった)双子の兄弟だ」「大人は鈍感であり、若者は敏感だ」と私が考えるようになったのは、数年ほど前からのことである。そのような話を雑談で交わしていた折に、いくつかの大学の教職員から伺ったのが、紹介したエピソードである。

世間知らずの学生が増えたのではない。世間や親、あるいは教師の言うことを聞かないどころか、素直に、真摯に受け止めて、「重く」「深く」「いろいろ」と考えすぎるほどに敏感で、感性豊かな若者が増えている。敏感(鈍感な大人からみれば過敏症)だと考えると、思い当たることが多々ある。会話能力がないという説も単純ではなさそうである。いろいろ相手の気持ちを忖度し、考えすぎていると、話し出しそびれてしまうようなのだ。「(就職なんて)、あまり深く考えなくていいよ」と言ってあげたくなる場面に私はしばしば遭遇する。敏感な若者に、「考える」ことを強制しているのが今の教

育方針だから、事態はますます複雑になり、混乱する。

今の大人たちにとって、進学も、就職も、そして、結婚も、ほとんど考えずに、どちらかといえば習慣的にいつの間にか、決まっていた出来事だった。大袈裟に言えば、標準化を設計原理とした工業社会は鈍感（でも生きていける）社会だった。しかも、長く続いた幸運な経済成長のお陰で、鈍感な大人は、自分の家庭と自分の会社のことを考えておればよかった時代を生きてきた。わが子さえよければよい、わが社さえよければよい、そういう自己中心的な生き方を蔓延させてきたのが今の大人たちである。戦後に作られた日本システムが破綻したのは、家族と会社という「市場」に過度に依存してきたからであり、市場の失敗による帰結であって、政府の失敗ではない。

脱工業化の豊かな知識社会は、脱標準化であり、選択の幅の拡大であり、不確実で、不安定な社会である。しかも、政府も大人も信用できないし、市場は本質的に短期的で、長期の信頼性は皆無である。「無業」および「未婚」は、敏感社会に生きる若者の実像ではないだろうか。

今の子どもたちは、敏感でないと生きていけない社会を生きている。安心して、何も考えずに、慣習的にくつろげるはずの家庭は、親のリストラ不安だけでなく、いつ親が離婚するかもしれないような雰囲気にある。いま一つの安定装置である地域社会では、近所の子どもが同じ公立学校でなく、違った私立学校に通学するようにもなっている。一番近くて便利な学校を信頼できる教室にするのが大人の役目であるにもかかわらず、公立学校も選択制にし、競争させるのがよいという改革を謳ったりしている。地域社会の子どもたちは、誰もが転校生のような緊張にさらされている。そして、大学でろくに勉強をしてこなかった大人が、大学の成績を厳格に評価しろと提案し、学校の知識は役に立たないと公言してきた会社や先輩が、手のひらを返したように、役に立つ勉強をしろという。信用できない大人たちの社会だから、いろいろ考えないとヤバイ気がするのである。

安心して信頼できる、考えずに行うことができる慣習を持ち合わせていないのが、今の若者である。彼、彼女らが、考えすぎずに、安心して、信頼できる社会をつくることはできる。見知らぬ他人同士が助け合う社会システムが存在するし、可能だからである。見知らぬ他人の資金を集めて、見知らぬ他人のために資金を使う税金による社会政策のことである。

社会政策の根幹は、公教育システムと年金システムの設計にある。この二つを連動させることによって、社会資金の三世代循環賦課方式を採用するのが長期的にみて合理的であるし、人間的である。年金の個人積み立て方式は必ず破綻する。市場は短期的で長期の信頼性がないからである。年金の資金は働く世代が引き受ける。働いている世代もいずれは次世代のお世話になる。将来に働く若者の教育は、将来お世話になる現世代と今の引退世代が協力して負担するのが大人としての合理的理性である。年金を働く世代に委ねておきながら、将来に働く若者の教育を個人負担させるというのは、失礼だろう（もちろん、賦課方式と個人負担方式とのバランスは調整する必要がある）。

学ぶ世代、働く世代、引退世代、の三世代にわたる循環的親孝行システムが、少子高齢社会を設計する骨格だと私は考えている。しかも、素敵なことに、教育は、未来の個人生活と社会全体を豊かにする社会経済効果をもった公共投資である。教育への投資はペイしているのである。加えて、しかも、助け合いの道徳を教えるのが教育である。

今の大学改革は、誰のための改革なのか？改革のメッセージは、誰に向かって発信されているのか？教育改革は、若者へのメッセージでなければならないはずだ。

中央教育審議会の「我が国の高等教育の将来像」は、誰に語りかけているのか？若者ではなく、各大学に語りかけているようである。中間報告（案）の「はじめに」にこうある。「我が国の高等教育改革は、……システム改革の段階から、各機関が……成果を具体的に競い合う段階へと移行する最中にある」。改革のボールを大学に投げている。大学が学生のために改革するのは当然だから、それでもよいのかもしれない。

しかし、各大学ができることは限られる。各大学の努力を支援する未来の高等教育システムの政策（資源配分）を考えるのが政府の仕事である。いま求められているのは、大学の法制度改革を一段落させて、その先にある教育の社会経済政策を考えることである。我が国の高等教育は、「システム改革」の段階から、「社会経済政策」へとシフトアップする段階へと移行しなければならない。鈍感な大人には分かってもらえないだろうが、敏感な若者には分かってもらえそうな気がした05年の初夢である。

第32回研究員集会報告

高等教育研究開発センターは、第32回研究員集会（2004年度）を昨年11月26、27日の両日にわたって開催した。テーマは「大学教授職の再定義」であり、世界的な規模で進行している高等教育の変動が、大学教員に及ぼしている影響を検討する試みであった。詳しい集会の記録は、まもなく刊行される叢書に収録されるので、ここでは、2日間を通じて目立ったトピックを紹介しておく。

そのひとつは、フィンケルシュタイン教授の講演でも触れられていた高等教育の市場化がもたらす分権化とアノミー状態、その限界である。教授は、アメリカの経験として学問財を普及する上での市場モデルの限界について述べていた。先駆的な研究として、G. ローズ、S. スローターの *Academic Capitalism* (1997) が刊行され、おりしも昨年9月にはその続編 *Academic Capitalism and New Economy* (2004) も出版されている。高等教育における市場モデル礼賛の傾向の強い日本の高等教育においては、強い注意を払う必要があるだろう。

もうひとつは、ある意味でパラドキシカルだが、アカデミック・フリーダムの再考である。2日目に生駒氏が説いていたが、大学にとって核である教員の自律性が危うくなっていることである。研究の生産性をあげるために教員の流動性が要件で、そのために任期制が有効であるといった主張がなされてきたが、本当に有効なのかどうか、特にテニユアの縮小は教育研究を発展させるのかどうか、真剣に議論されるべきだろう。

また、教員のアカデミック・フリーダムと機関のオートノミイの関連と区別について、センターのモーガン COE 研究員も含めた討議がなされ、単純に同一視しがちな日本の状況も多少あぶりだされた。しかし、むしろ、2日間を通じて明らかになったのは、われわれはまだよくものを知らないで論議している、ということではなかったかと思う。そのほか、1日目の寺崎講演、2日目の望田、加藤報告のいずれも充実し、じっくり腰をすえて読んでみたい内容であった。発行予定の叢書をお待ちいただきたい。（研究会係）

COE プログラムの経緯

拠点リーダー：有本 章（高等教育研究開発センター長）

3年目の2004年度（『コリーグ』No.37の報告以後）では、全体会、リーダー会議、各班会議、プロジェクト関連の公開研究会などを開催したが、その間の重要事項は中間評価ヒアリングと結果の公表の2点である。

- (1) 中間評価では、21世紀 COE プログラム委員会が書面、ヒアリング、合議評価、必要に応じて現地調査又は再ヒアリングを行った。2004年5月18日に学術振興会で行われたヒアリングには3名（拠点リーダー、山野井、小方）が出席した。拠点リーダーによる、パワーポイントを使用して行った10分間の報告に対して、20分程度質疑が行われ、①全体の成果、②調査費用の使い方、③女性スタッフの補充、③若手研究者養成と院生の海外派遣、などが中心となった。その後、特に補充の現地調査やヒアリング等はなかった。
- (2) 委員会は2004年11月30日に結果を公表し、総括評価は「当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。」とした上で、コメントは「実施計画が具体的・詳細に開陳されており、また計画にそって地道な努力をして成果をあげていることは評価される。」と実績を評価した。同時に「しかし、『世界最高水準の研究教育拠点』形成のためには、地道さと同時に大胆さと冒険も必要であろう。その点でいくつかの注文もある。」とされ、具体的には、①「実情調査以上の構造的問題についての研究にもっと進み、申請書にも示されているような知の再構築についてのチャレンジングな研究成果（たとえば学問や学部という分類学の脱構築など）を期待したい。」②「高等教育におけるジェンダー問題（制度・組織論など）についてもっと研究を進めてほしい。」③「若手研究者育成についても、アンケート調査やデータ分析以上のしっかりした理論的背景（社会学理論であれ、経済学理論であれ）をもち国際的に活躍できる人材養成を望みたい。」としており、最後に、「重要な研究テーマだけにさらなる研究・教育の発展に期待したい。」と要望を行っている。なお、人文科学分野採択プログラム20件には、A評価2件、B評価10件、C評価6件、D評価2件のランク付けを行い、当プログラムはBと判定している。

全体的には、計画書内での実績を評価しながらも、計画書を超えた高度な内容への注文も窺われ、その点への取組みは今後の課題となる。

有本センター長のご退職によせて

40年、後輩として、同僚として

山野井 敦徳（高等教育研究開発センター教授）

有本先輩もいよいよ定年を迎えられることになった。早いものである。はじめての出会いはずいこの前のように思うが、後輩として40年、同僚として早や10年たった。

そもそも広島大学の教育学科時代の新堀門下生として、研究室に出入りするようになってから後輩としておつき合いがはじまった。学年が違うので授業で机を並べたことはなかったが、当時としては珍しく英会話を学ぼうということになった。当時はアメリカ人も少ないため、原爆傷害調査委員会（ABCC）の研究員の奥様をお願いして英会話の手習いをはじめたことがあった。先輩はあのころから語学の才にたけ、表現力が豊かであった。娯楽の選択幅のなかった当時、アフターファイブと言え、ソフトボールや卓球に興じるしかなかった。いつもひょうひょうと柳のごとく粘り強い試合運びが印象に残っており、大負けをすることはほとんどなく、最後には帳尻を合わせている。そういう辛抱強さは当時からすでにお持ちであった。趣味はクラシック。それもオーケストラ編成。それもとびっきり大規模な編成がお好みであった。パート、パートの旋律に非常に敏感に興味を示された。当時、キャンパスでよく開催されていた「昼休みレコード鑑賞」なるものによく参加され、時々誘われたこともあった。日常でも、人付き合いが良く、特に大先輩の先生方から可愛がられ、後輩からも慕われた。独身時代の話だが、女性のほうから心寄せた方が何人もおられた（ようだ）。

話題を変えよう。いまでは喫茶店にはやらないが、そこで新堀学派や研究について論議に花を咲かせたものだ。本当にまじめな時代であり社会であった。先輩の持論は「我々は常に2番手で行くべきだ」であった。「東京の一流の才能に競争していくには並大抵ではないが、2番手なら努力で何とかなるものだ」という話を何度か伺ったことがある。この背景には、日常のWalkingや健康管理にも似てガンバリズムの思想がある。ご定年を迎えられた今考えてみると、これは永い人生を見据えた偉大なる教訓であることが理解される。人生はマラソンに例えられるが、後先を考えないではじめから飛び出す選手はいない。現在ではナンバーワンを目指す競争はグサイ、オンリーワンだという声が聞こえそうだが、先輩の2番手志向・ガンバリズムには筆者も感化を受けた。後学の人にはご参考になるかも知れないので紹介しておきたい。

当センターは研究所であり、そのため共同研究は重要な行事として位置づけられている。この共同研究体制の在り方には、有本先輩のオーケストラ編成観の才能が遺憾なく発揮されていたように思う。プロジェクト発足時には、常に誰をどこに何時入れるべきかについて、端から見ても非常に苦心されていた。私は10年前から、乞われてこのオーケストラのコンサートマスター？として参加し、いつもブレインとして期待をされたが、不協和音を奏でるばかりで、ご期待に沿えたかどうか、はなはだ自信はない。しかし、我が演奏に興奮しながらふと指揮者台を見上げてみると、なんと肝心の指揮者が見あたらないではないか!!! あわててあたりを見回すと、一人一生懸命、納期に間に合わせるための内職（個人研究）に励んでおられる。惰眠をむさぼっておられるのであれば怒り心頭ものだが、一心不乱のご努力には頭が下がる。演奏が終わる直前になって演奏台に駆け上り、髪を激しく振り乱し、したたる汗もものともせずタクトを振り回しまとめ上げてしまう。お見事と言う他はない。しかし、指揮者台に立てば誰にでも上手くリードできるものでもなかろう。名曲は容易に迷曲に墮する。某教授の指摘の通り、大学紛争以来、キャンパスは猛獣？の楽園と化し、どこから噛みつかれるか分かったものではない。このような大学をまとめあげるのには並の人ではうまくはいかないだろう。もちろんセンターには心優しい（筆者を除けば）優秀なスタッフがおり、とくに職員はピカイチである。加えて先輩の人を魅きつけるお人柄や広範なネットワーク、それに強烈な学問的野心などがあってはじめて上手なセンター運営が可能だったのだと思う。ただ、これから我がセンターも、法人化に伴い、評価、評価の荒波にさらされるので、どうなりますか、これは後学の皆さんの中から有本先輩のような名指揮者が輩出されることを期待したい。

駄文を連ねてしまったが、有本先生のご功績とこれまでのセンターへのご尽力には、深く御礼申し上げます。この10年間、後輩にもかかわらず失礼な意見の数々、ブレインとして、センターのためとお許しいただくしかない。いずれにせよ、先輩・後輩の兄弟船？として、あるいは同僚として過ごしたこの10年間は、筆者にとって前の職場では到底めぐまれないような数々の貴重な経験をさせていただいた。記して感謝申し上げます。文部科学省のCOE研究プロジェクトの義務（ノルマ）がまだ果たされていない。まだ単位修得の認定が不可能なため満期退職というわけにはいかないようだ。法人化して自由化されたとは申せ、広大の特任教授としての処遇では残念ながら厚遇とはならないようであるが、先輩には今しばらくご辛抱をお願い申し上げる次第である。

阿曾 沼 明裕 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授)

有本先生に初めてお会いしたのは、平成2年(1990年)冬の大学院入試の時でした。筆記試験の監督に少し怖そうな先生がいたこと、面接の時に、その少し怖そうな先生と優しい先生が科学社会学について(私を無視して)議論していたのを憶えています。その優しい先生が有本先生でした。そして、不合格になりかけていた私を拾って下さったのがその優しい先生と怖そうな先生でした。

でも優しい先生は、芯の強いとてもしぶとい先生だと直ぐに分かりました。先生は当時ふっくらとされていましたが、健康のために、食事制限や毎日歩くことで短期間にスリムになりました。私は自分が怠惰な人間だけに、ストイックな先生だと思いました。「阿曾沼君、歩くのにいい靴はないかね?」とお尋ねになったのを憶えています。そして、先生のご指導が進むにつれて、次第に先生のしぶとさが身にしみるようになりました(すみません、学問的硬派と言うべきかもしれません)。社会学的な方法論の重要性を嫌というほど聞かされることとなります。軟派な私はそれに反発したこともありましたが、でも、そのおかげで、学問的方法論について一時期でも考え悩まざるをえなかったことは、今思えば良かったと思います(もちろん、その教えに沿えるような段階には今でも至っていませんが)。また、先生とマンツーマンで、Ben-Davidの著書や論文を読んで議論したことは、今でも私の知識の重要な基礎となっています。

しぶとく、一時は狭量ではないかとも思った有本先生ですが(すみません)、実は柔軟で寛容な先生だということは、後からだんだんと分かるようになりました。金子先生に高等教育財政を学び、成定先生に科学史・科学社会学を学ぶなど、そのほか幅広く学ぶことができたのは先生のおかげですし、博士論文を書くことができたのも先生のおかげです。また、最近とくに、モード2、起業家の大学、アカデミック・キャピタリズムなどの議論や研究評価を考える上で、マートンと有本先生の科学社会学が自分の思考のベースを提供してくれていることをしばしば感じます。

ひねくれ者で文句が多い私のような人間にとって、有本先生は父親のような存在です。これからも変わらずお元気で、ご指導ください。

天野 智水 (長崎大学大学教育機能開発センター講師)

10年前に私が大学院に入学して以来、有本先生には研究上のご指導のみならず、生活面にもわたって常に暖かい励ましの言葉をいただけてきました。

感謝の念とともに印象深く思い出されることがたくさんあります。しかし、先生のご退職に際し最初に頭に浮かんだのは、先生の研究室の書棚に、私の名前が書かれたファイルホルダーを見つけたときのことです。それはありふれた光景で、とりたてて述べるようなことではないのでしょう。でも、これから先生の指導のもとで院生をやっていくのだなあ、と実感した瞬間でした。はじめての修士論文中間発表を行う頃で不安だったためか、私の拙い発表レジュメが入っているそのファイルホルダーが、弟子入りを認められた証のように心強く、誇らしく思えたのでした。

あまりに感傷的なことを書いてしまいましたが、講義や論文指導の際には、先生のお話私の興味関心が常に焚き付けられ、遠慮なく疑問をぶつけずにはいられない、そんな刺激的な院生時代でした。特に先生の比較社会学的研究はおもしろく、いくつかの研究プロジェクトに加えていただいた中でも、先生とともにバートン・クラークの『大学院教育の国際比較』の翻訳に携わる機会をいただいたのは、大変な喜びでした。また、出来のよくない私のような学生を辛抱強く、寛容の精神で見守っていただいた、そのお人柄にも感謝せずにいられません。

この度、一つの区切りをお迎えになられたわけですが、これからも焚き付け続けていただきたい、と勝手ながら願っています。先生の論文を読むたびに、新たな課題をつきつけられて思索にふけってしまうのですが、これからもどうか宿題を出し続けてくださいますよう、お願い申し上げます。

小方 直幸 (高等教育研究開発センター助教授)

有本先生にお世話になってかれこれ15年が経ちます。ご存知の方がほとんどだと思いますが、私の場合には大学院に引き続いて職場も一緒です。あまりに距離が近すぎてピントがずれているかもしれませんが、この機会に私の目に映った先生の日常の一コマを綴ってみます。

研究室は作業の場

有本先生のお部屋は応接のスペースがありゆっくりと滞在できる“オフィス”とはお世辞にもいえません。先生の部屋はギルドの親方の作業場なのです。どんなに忙しくても快く入室を認めてくださる反面、そこでは多くを語られません。むしろ所狭しに積み上げられた書物や入室直前までの作業の余韻から、学者としての生き様を盗むことが要求されるのです。先生はよく中世の大学のお話をされますが、それを彷彿とさせる場です。

廊下は社交の場

有本先生と私の部屋は玄関をはさんで反対側に位置していて、1日のうちで直接お会いする機会は、出勤・退「学」やトイレの時など、それほど多くありません。でも廊下でお会いする際には、私の家族の近況など、もっぱら仕事以外の話題が中心です。廊下では親方の姿というよりも親父の顔に変わります。だいぶ前にお話ししたちよつとした家族内の出来事も覚えておられ、何かと気を遣ってください、肩の力がふっとぬけます。

研究会は遊びの場

有本先生が子供の顔になる時—それがセンターでも頻繁に行われる各種の研究会の場です。特にセンター長としての挨拶等、役職としての業務が課されていないケースでは、半世紀前のお写真をみる感じがします。子供が積み木や絵を描くことに没頭するかのようメモをとられる際の、そして質疑応答の際の生き生きとしたご表情は、永遠に止まらない知のメリーゴーランドに乗っておられるような微笑ましいものです。

自宅は気を養う場

センターで“散歩”といえど誰もが先生の名前を口にするでしょう。先生は大変お忙しくて日本におられないこと

も度々ですが、帰国後は翌日から何事もなかったように仕事をされます。そのタフさを支えるのは、1つは常に健康に気を遣われ欠かさず実践されている散歩です。もう1つは、何回か自宅に訪問させていただいた際に感じたことですが、素晴らしい奥様の存在です。そこは、先生にとっては欠かせない滋味に富んだ空間なのです。

私の研究室は作業場とはほど遠く、廊下は歩くための場所となり、研究会は目を開けていますが頭が寝ている時もあり、自宅では子供のおもちゃとなっています。私は時々、年輩の諸先生が私と同年齢の頃に書かれたものを読む機会があつて愕然とするのですが、現在の私と30代半ば当時の有本先生との間にも既に歴然とした差がある気がします。残りの25年間でその溝をどこまで埋められるのか—それが今なお恩師から与えられている重い課題です。

福留 東土（一橋大学大学教育研究開発センター講師）

有本先生には、修士課程に受け入れていただいて以来、指導教官としてお世話になってきました。先生は、学生に対していつも寛容な姿勢で接して下さり、研究指導においては、何よりも学生個々人の意思を尊重して下さいました。時折、学生に対して厳しいお言葉を掛けられることもありましたが、思い起こしてみるとそれは、学生側の意思が曖昧であるときでした。私などは、先生のご寛容さに随分と甘えてしまった部分があります。しかし、遠回りではあつても自分の頭で悩む自由を与えていただいたことで、自分自身の関心と向き合わざるを得なくなり、自分の関心をどのように理解し、表現し、展開させればよいのかといったことを教えていただきました。それは、先生が学生を信頼し、愛情を持ってその成長を見守って下さるからです。先生はそれを言葉に出されることはまずありません。しかし、長年ご指導いただく中で、折に触れてそのことを実感しました。曲りなりにも大学教師としての第一歩をようやく踏み出そうとしている今、そのことの大切さを改めて噛みしめています。

また先生は、講義の中で高等教育の基礎的研究の重要性を繰り返し主張されました。それは高等教育研究におけるセンターの役割とつながっているのだと思います。その一方で、専門の解説をされている途中で、大学でのご自身の経験を持ち出され、気が付くと、先生も学生も元の話が何であったか分からなくなるという脱線もありました（学生にとってはこれが密かな楽しみでした）。先生の講義は、専門研究の伝授の場であると同時に、無垢な大学院生が大学の生の姿を垣間見ることのできる貴重な機会でもありました。大学の現実に拘泥しすぎれば大きな方向性を見失い、理論を重視しすぎれば現実の姿がみえなくなります。高等教育研究には両者の往復運動を通じて、このジレンマを止揚させていくことが求められているのだと思います。多くの大学のセンターでは現実に迫り来る問題への対応に重心を置かざるを得ません。その中で、広大センターの位置づけがこれまでも増して重要なものであることは、センターを離れてますます実感しているところです。退官されてからも、豊富なご経験を元に、日本の大学にとっての羅針盤としての役割を果たされるものと確信しております。

先生、ありがとうございました。そしてこれからも、よろしく願いいたします。

高等教育公開セミナー報告

平成16年度高等教育公開セミナー「高等教育に関する重要課題や最新の話題」

公開講座から通算して4回目となる本年度の高等教育公開セミナーは、標記主題の下で8月23日から24日にかけて開催された。本セミナーは年を追う毎に関心の高まりを見せ、本年度は定員（40名）を超過参加申込が寄せられたため、一部の申込者には参加をお断りするほどであった。また、参加者についても、中四国・関西のみならず、関東や東北からの参加者も含まれた。

本年度のセミナーは、例年とは異なって、セミナーを通じた体系を考慮せずに、各教員が関心のあるところ、或いは講義とするに適切と考えるところを、それぞれの講義で取り扱うこととした。結果的には、評価を取り扱った講義が多くなったが（但し、教員間で内容が重ならないよう調整した）、現在の高等教育界の状況を反映した結果であろうと考えられる。

本年度のセミナーの内容（講義名・担当）は以下の通りである（講義実施順）。

- 「大学職員の専門職化—米国と英国との比較の視点から」（大場淳）
- 「変化するアカデミック・プロフェッション像—仕事・キャリア・処遇・役割期待」（山野井敦徳）
- 「大学改革の現在」（有本章）
- 「大学の戦略的管理運営—英国の20年間にわたる試行錯誤と現状・課題・展望」（横山恵子）
- 「大学の戦略的運営のための大学評価—身近な資料から自らを知る」（村澤昌崇）
- 「18才人口減少期における大学入試のゆくえ」（大膳司）
- 「大学運営に生かす評価とは—何が可能で何が不可能か」（羽田貴史）
- 「中国における高等教育の大衆化—現状、課題と展望」（黄福涛）
- 「教育評価と意思決定の数理」（北垣郁雄）
- 「社会人大学院の効果」（小方直幸）

セミナー終了後のアンケートにおいては、回答した者32名中14名が「十分に満足している」、16名が「ある程度満足している」、2名が「どちらとも言えない」を選択し（他の選択肢は「あまり満足していない」、「不満な点が多い」）、受講者の評価は概ね好意的であった。しかしながら、講義時間が短く質問の時間が十分ではないなどといった指摘もあり、これらについては次回に向けての反省点とすることとしたい。（文責：大場淳）

新任者・離任者から一言

客員研究員



井口 春和 (いぐち はるかず)
核融合科学研究所大型ヘリカル研究部
プラズマ制御研究系助教

私の所属する研究所では博士課程の大学院教育を行っていますが、一般に日本の大学院教育は徒弟制度的な側面が強く、現代科学の最先端を組織的に教育する方法論が明確になっていません。したがって、研究論文を書かせ、外見的成果を上げることが学位授与の資格判定になっていることが多いようです。大学院教育における米国との大きな差はこのような方法論の不在のためであるように思われます。高等教育の専門家の皆さんと議論し、この状況を改善する道筋を見いだせないものかと考えています。



岩本 健良 (いわもと たけよし)
金沢大学文学部助教授

永平寺は禅の専門道場ですが、ほとんど座禅をしない僧もいます。典座(てんぞ)と呼ばれるその僧達はおつばら修行僧のための食事を司っています。他方、プロ野球では選手とフロントが明確に分かれています。私自身は社会階層と高等教育・入試制度・進学移動などを研究しつつ、学内駐車場で夜中の暴走車を制止することも時々あり、日々自問もしています。先日、研究員集会(テーマは「大学教授職の再定義」)に初めて参加させていただきました。これからよろしくお願いいたします。



苑 復傑 (えん ふっけつ)
メディア教育開発センター助教授

卒業してから12年間離れた母校、広島大学高等教育研究開発センターに、客員研究員として再び帰ってくるようになりました。私が在学した時代の大学教育研究センターは広島市千田町キャンパスの古い大学図書館の最上階にありましたが、いまは西条キャンパスの真っ白な建物に移り、組織も大きく拡大・成長しているのを見ると感無量です。私は現在高等教育へのメディア利用を、グローバルな観点から分析することを課題にしています。激動するアジアの中での高等教育を研究するうえで、高等教育研究開発センターでの交流は私にとっては貴重な機会となると思います。どうぞよろしくお願いいたします。



加藤 毅 (かとう たけし)
筑波大学大学研究センター講師

知識基盤社会におけるビジョンを構想するために大学はいかにあるべきか。高等教育研究と並行して社会人大学院(筑波大学ビジネス科学研究科)の教育を担当するこの数年間の、中核的な問題関心です。

おそらく、現在の単純な延長上にもはや未来はない。故に、これまで主流をなしてきた外挿法的な研究方法は有効性を失うことになる。それでは、いかにして「未来を発明」するか。この貴重な機会に、いろいろ勉強をさせていただきたく、よろしくお願いいたします。



清水 建宇 (しみず たてお)
「大学ランキング」編集長/
朝日新聞論説委員

1954年に「大学ランキング」を創刊して以来、10年余にわたって大学評価の数値化に取り組んできました。第三者による相対評価を定着させることが目標です。データは、研究や教育だけでなく、社会とのかかわりなど約60のジャンルにまたがっています。今後は、各指標の時系列変化や、それぞれの指標の相関関係も調べ、高等教育の研究に少しでも役立ちたいと考えています。



妹尾 堅一郎 (せのお けんいちろう)
東京大学先端科学技術研究センター
特任教授

私は、長年にわたり主として社会人向け経営教育を行なうと共に、多くのプログラムをプロデュースしてきました。現在はその経験を活かして、東大先端研知財マネジメントスクールの校長役とMOT(技術経営)教育開発の責任者をしています。特に、「互学互修」という新しい教育モデルによる先端人材育成を実践しています。一方、学生教育ではWebサイトとセッションを通じたハイブリッド型授業を展開してきました。また、大学Webサイトの研究を長年続けています。これらの知見を基に研究のお役に立てればと思います。



高橋 寛人 (たかはし ひろと)
横浜市立大学国際文化学部助教授

公立大学協会の50周年記念誌『地域とともにあゆむ公立大学』の執筆委員を務めて以降、とくに歴史面から公立大学を研究してきました。関連して、地方自治体が公費でつくった私立大学を調査し、2004年に編著『公

設民営大学設立事情』を刊行しました。

もともとの研究対象は、占領文書を用いた戦後教育改革で、現在、教育公務員特例法中の大学教員の特則の成立過程を解明中です。

客員研究員の機会を生かして、高等教育の研究者の方々から学ばせていただきたいと考えております。



武谷 峻一 (たけや しゅんいち)
九州大学高等教育総合開発研究センター
教授/副センター長
(兼務: アドミッションセンター)

客員研究員のリストを拝見すると、そうそうたるメンバーがお名前を連ねておられ、いささか身が引き締まる思いです。私は、九州

大学にアドミッションセンターが設立された1999年以来、これまで5年半に亘って、AO選抜や各種追跡調査、高大連携、新しい学際教育「21世紀プログラム」の選抜・教育などに携わって参りました。そうした立場や経験から、微力ながら貴センターにおける研究開発への貢献ができればと思っております。



橋本 功 (はしもと いさお)
信州大学副学長 (人文学部教授)

昨年までは信州大学の授業評価や授業方法を改善するためのFD関連の仕事に携わっていましたが、今年からは教育、研究、組織、社会連携、国際協力、付属病院など

法人に関わるすべての分野の点検評価に携わることになりました。そのために私自身が大学の果たすべき義務と責任について、さらには、大学のあるべき姿について根本的に再考しなければならない状況に追い込まれました。2000年9月にOECDのIMHEの総会に出席しましたが、そのとき、21世紀の大学は世界レベルで大きく変革するだろうということを実感しました。客員研究員のポストを最大限に利用させていただいて、大学そのものと国立大学法人の役割について深く考えてみることにします。



橋本 勝 (はしもと まさる)
岡山大学教育開発センター教授

前任者の鷲尾誠一教授(岡山大学工学部)から引き継ぎましたが「就任」したという自覚のないままに時が流れています。時折センターから届く膨大な資料も読み切

れていないのが実情です。元々経済畑の人間ですが、岡山大学では何故かFDのキーパーソン(?)になってしまっています。橋本方式という多人数ゼミの実践者として、また、学生参画型FDの仕掛け人として全国的には少しだけある知名度を活かして今後何かお役に立てればと考えています。



横田 利久 (よこた としひさ)
中央大学経理研究所事務室長

大学改革のPLAN - DO - SEEを実現し定着させていく大きなポイントに、職員および職員組織の活性化と、大学のあらゆる分野・領域での教職協働の推進があると

思います。大学職員としてこの30年間、組合活動を含め、教務、財務、新学部設置・運営、収益事業、産官学連携などを担った自らの体験をふまえ、これらの課題解明とその実践に向けて、微力ながらながしかの貢献ができればと思っております。

学内研究員



岩沢 和男 (いわさわ かずお)
情報メディア教育研究センター講師

情報メディア教育研究センターにて映像ライブラリーを担当しています。「アーカイブ・コンテンツを用いた教育・学習支援」をテーマに、講義等の収録、コンテ

ンツ化およびその利用方法について、サービスと研究を平行して進めています。既に、メディアセンターでは講義映像を元に「復習用Live教科書」というコンテンツを開発いたしました。また次年度から稼働するセンターの新アーカイブ・システムでは、より柔軟なアクセス制御が可能になります。それらを活かして2005年度は、授業等への応用面での成果を報告したいと考えています。



永井 克彦 (ながい かつひこ)
総合科学部教授

専門は物理学で超伝導や超流動などの極低温で生じる現象の理論的研究を行っています。最近、教養教育で一般物理学の講義を担当し、高校で物理を履修してい

ない学生に、いかに物理の面白さを伝え、興味をもってもらうかということを考え、いろいろと試行してきました。センターの行事にはなかなか参加できないのですが、大学における理科教育の面でいろいろとご助言を頂けるのではないかと期待しています。



樋口 聡 (ひぐち さとし)
大学院教育学研究科教授

教育学研究科の学習開発学講座に所属し、学びについての哲学的・美学的研究を専門にしています。吉里副学長が、『コリグ』第37号で、国立大学法人の意味につ

いて、英語のcorporationから、大学を「身体を持った存在」と捉える見識を示していますが、この比喩的理解は、吉里副学長の思い以上に、現在の大学を考え

る上で示唆的であるように思います。高等教育研究開発センターの学内研究員を務めるこの機会に、それ自体が一つの身体的存在である大学とは何なのか、そして実際に何であったのかを考察してみたいと考えています。



平田 道憲 (ひらた みちのり)
大学院教育学研究科教授

このたび学内併任研究員に任命された平田道憲と申します。広島大学大学院教育学研究科の人間生活教育学講座に所属しています。中等教育の家庭科教育に関連する講座であり、私はそのなかで生活経営学分野を担当しています。研究テーマは生活時間配分からみた生活経営です。中等教育と高等教育の共通点と相違点は何か。この2つの教育の連携はどのようにあるべきか。併任研究員としてそのようなことに関心をもって勉強していきたいと考えています。

新任者



杉原 敏彦 (すぎはら としひこ)

平成16年4月1日付けで着任しました杉原です。昨年度までは、広島県教育委員会で高校教育を担当していました。具体的には、高校と大学の接続についてその仕組みづくりを行ったり、高校における進路指導の取組み等について各校を指導したりする仕事に携わっていました。この度、主客とところをかえ、大学の側から、入学者選抜や高大接続について、研究・実践する機会を得ることとなりました。中等教育と高等教育のいずれについても直接体験を持つというキャリアを活かし、これからの時代の入学者選抜や高校と大学の接続について、課題の把握・分析に努めるとともに、あるべき姿について積極的に意見を述べていきたいと思っています。(杉原先生は平成16年6月1日より入学センターに教授として異動されました。)



横山 恵子 (よこやま けいこ)
高等教育研究開発センター講師

平成16年4月1日付けでセンターの講師として赴任致しました。アメリカでMA、イギリスで、質的手法を使い、理論・実証の双方を整合させた博士論文、*Ideologies, Policies and the Control of the University Systems in England and Japan*でPh.Dを取得しました。幼児期に、広島で1年程暮らしたことがありますが、ほとんど記憶に残っていません。広島の人々が親切で、丁寧、優しいのに感激しています。専門は比較高等教育政策で、国際化論を担当する予定です。どうぞ宜しくお願い致します。



李 東林 (リー とうりん)
広島大学特別研究員

広島大学大学院教育学研究科の留学生であった頃から、センターの先生方や事務の方々にいつもお世話になっております。センターの優れた教育・研究環境には大変魅力を感じています。幸いにも、2004年4月よりセンターのCOE研究プロジェクトに参加する広島大学特別研究員として採用され、大変幸運に恵まれたと思っております。

センターのCOE研究プロジェクトでは、高等教育に関する幅広い領域の研究が行われ、さらに国際比較の視点から、欧米だけでなく中国における高等教育の発展状況も研究の視野に入れられています。私自身が日本と中国の高等教育に関する研究を行っているため、このようなCOE研究プロジェクトに参加する機会を与えていただき、非常に嬉しく思っています。そしてそれ以上に、COEプログラムの成功とセンターの発展のために微力ながらも尽力するつもりですので、よろしく願いいたします。

離任者



岩田 光晴 (いわた みつはる)
慶応義塾創立150周年事業準備室
課長

平成13年12月の赴任から約3年弱、短い間でしたが、センターのスタッフ、コリーグの皆さんには大変お世話になりました。昨年10月、単身生活にピリオドを打って慶應義塾に転職しました。人生の折り返し地点に立ち、自分の情熱を大学に注ぎたいと決心し、広島大学ではたくさんの支援をいただきながら、様々な活動をさせていただきました。その経験はとても得難いものであり、今後の活動において活かしていきたいと思っております。引き続きご指導のほど、よろしく願いいたします。また、こちらにお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。

修了生



福留 東土 (ふくどめ ひでと)
一橋大学大学教育研究開発センター
講師

この度、一橋大学大学教育研究開発センターに専任講師として赴任致しました。センターでは、大学院生、学振研究員として7年間にわたり大変お世話になりました。先生方の叱咤激励を受けながら何とか書いた拙い修論、米国留学、計4年かけて書いた(これまた拙い)博論、COEプロジェクト・・・研究以外でも思い出は尽きません。センターは人の入れ替わりが激しいのですが、その分本当に多

くの方々に、様々なかたちで支えていただきました。心より御礼申し上げます。まだまだ未熟で力不足ですが、これからはこれまで考えてきたことを実践の場で生かせるよう、努力と工夫を重ねてゆきたいと思えます。センターを離れはしますが、先生方やコリーグの皆様は助けていただくことはこれまで以上に多くなると思えます。一人の研究者として今後ともどうぞよろしくお願い致します。

大学院生



野地 知子 (のじ のりこ)
博士課程前期高等教育開発専攻

仕事と大学院の二重生活も9ヶ月になり、先生方から「そろそろ慣れてきましたか」などと声をかけていただいておりますが、まだまだ院生としての自覚不足で、落ち着いて研究する環境を持てずにいます。仕事面では「考える仕事」が増えたなど実感しています。以前は前例やマニュアルに従って処理していましたが、今では、スピード、コスト、リスクなどを考慮して、よりよい成果に結びつけようと思うようになりました。現在所属している国際部は企画的な仕事も多いので、大学院の経験を活かして改善できれば、と思っています。



廣内 大輔 (ひろうち だいすけ)
博士課程前期高等教育開発専攻

他大学の工学部を卒業し、5年間ほど鉄工所の工員として働いた後、今春入学しました。大学在学中より高等教育に関する諸問題に関心がありましたので、現在ここ高等教育研究開発センターで学ぶことを満喫しております。主な関心領域は学生に関する諸問題であり、とりわけ学生の位置づけや学生文化、学生自治組織に関心があります。また小さな私立大学のことを知るのが好きです。よろしく申し上げます。



劉 振宇 (りゅう しんう)
博士課程前期高等教育開発専攻

広島大学に入学してから、早くも9ヶ月が経ちました。高等教育研究開発センターというすばらしい環境の中で、先生方をはじめ、職員、先輩、同級生の皆さんには、勉強や生活面などの相談にもものっていただき、大変充実した生活を送っています。関心領域は、大学の管理運営と人的要素の関係についてです。興味のある方はぜひご連絡ください。



王 琳 (おう りん)
研究生

私と日本との縁は、私が北京外国語大学(元北京外国語学院)日本語学部に入学した時に始まります。卒業後は日本との貿易に従事する中国の会社に就職し、その後広島にやってきましたが、センターの研究生になるとは夢にも思っていませんでした。

高等教育学は私にとっては全く新しい領域で、うまくやっつけられるかどうかあまり自信がありません。でも先生方の熱心な指導と、小貫さんをはじめ同じ研究室の先輩達の親切な助けで、少しずつ高等教育に関する知識を深めています。どうぞよろしく願いいたします。



劉 暢 (りゅう ちょう)
研究生

私は中国の内モンゴル自治区赤峰市の出身で、2003年7月、内モンゴル大学外国語学院日本語科を卒業しました。現在はセンターで研究生として学んでいます。

日中両国の高等教育の比較研究を主眼に、両国の高等教育の現状、発展のプロセスに影響する政策等の要因を研究したいと思えます。そして、これからの中国の国情に適する高等教育の発展方向を探りたいと考えています。宜しく申し上げます。

センター滞在記



RIHE After 32 Years

Ulrich Teichler
University of Kassel, Germany

The year 2004 was not a special year of celebration for RIHE, because the 30th anniversary was celebrated two years earlier. But it was a special year for me - the foreign scholar who had been the first foreign visitor of RIHE many years ago and the first foreign scholar invited to contribute to *Daigaku Ronshu*. Now, I eventually had the opportunity for the first time to accept the invitation to spend a few months at RIHE as a visiting professor.

It was a good opportunity to analyse recent developments of higher education in Japan. I interviewed many experts in order to explore the extent to which the pattern of the Japanese higher education system has changed during the last 10-15 years. I also had time to finalize various publications which were overdue. My wife Yoko and I enjoyed living again in Japan for an extended period. We often spent weekends traveling to places that we had not previously known.

In some respects, doing research at RIHE is similar to doing research at our Centre in Kassel (Germany), which was founded 27 years ago. The size of the two institutes is similar, and at both institutions scholars are actively involved in many and diverse projects and tend to be "very busy". Both institutes also have to cope with a lot of complicated administrative regulations. Without any envy, but with admiration I can say that Japanese people are exceptionally kind to their guests. I enjoyed the hospitality and the enormous support at RIHE.

I became aware of another difference when a young researcher of RIHE came to my room and showed me the CV of a "senior researcher" of CHEPS, the Dutch institute founded 21 years ago that is similar to our Centre in Kassel. I explained him that more than three quarters of the scholars of the Dutch institute as well as of our Centre in Kassel do not have the title of professor, even though some of them have already been involved in higher education research for more than 10 or even 20 years. Some senior researchers might be comparable in rank to assistant professors or to associate professors in Japan. In many respect, it is more comfortable and honourable for some Japanese colleagues to have the title of professor. On the other hand, those who are not officially professors at our Centre in Kassel have no or hardly any teaching obligations and can concentrate fully on research. Moreover, those not in professorial ranks are expected to cooperate more strongly in research teams; and one could probably say that the status hierarchy at the Dutch institute and at our Centre in Kassel is somewhat flatter than at RIHE.

Finally, life at RIHE is also shaped by master's and doctoral students, and I enjoyed being in touch with them. In Kassel, we used to have young researchers, paid full-time or part-time with the help of research grants and a few doctoral candidates not involved in doctoral programmes. Just in autumn 2004, we have started a master's programme in higher education with 15 students, and we find it interesting to be in contact with so many young highly motivated, future researchers in higher education. As the language of instruction and communication is English, I am impressed to note how good are the master's students from various countries in English. About half of our master's students have already had experience of work or are studying part-time while working professionally, for example as teachers in adult education, free-lance consultants of universities or as specialists in universities.

It is fascinating to get to know the internal life of different research institutes and to observe how discussions run, what cooperation among researchers means and what styles of communication prevail. I had opportunity for such comparison in Japan, and I am pleased that two doctoral students from RIHE will be at our Centre soon and so have a similar chance to appreciate and to get to know the inner life of another institute which is involved in the same area of research.

Kassel is known in Europe as the city of the Documenta - somewhat of an "Olympic Games" of the fine arts every five years. But Hiroshima is better known worldwide - however for a sad history. My wife

and I were invited by the mayor of Hiroshima to attend the ceremony on 8 August 2004. Our colleagues in Hiroshima and Kassel are devoted to research on higher education, but often we are reminded that we live in a world in which some problems are more grave than that of a professor with a poor publication record, a bureaucratic ministry or a lazy student. Some elder colleagues at Hiroshima and I experienced the war as children. I hope that the young researchers at both institutions will have the opportunity of doing interesting research in their area of expertise all their professional life without facing a war.

(タイヒラー先生は平成16年4月～8月まで広島大学外国人研究員としてセンターに滞在されました。)



Saijo in My Eyes!

梁 燕 玲
謂南師範学院 (中国)

Saijo is so quiet and peaceful in my eyes. Everyday I can meet the same people at nearly the same time in the same place. A thin and long river is running away through the green grass and an old man, busy cutting. Even the pretty housewife sitting silent in the early morning with her little dog daggling around her near the riverside. For the first time I found we could live such a life without words and just for the sudden silence I was calming down and down, to get a harmony with Saijo.

People in Saijo are for work. From the early morning till the late night, the light in offices would shine. Even the little children could give you a shock with their few clothes in deadly cold weather on the way to school.

Saijo is so lovely in my eyes. Especially when I was becoming one of them, the peace is so enjoyable. That is why although I left, I can still feel it, touch!

(梁先生は平成16年3月～8月まで広島大学外国人客員研究員としてセンターに滞在されました。)

情報調査室だより

ホームページ内「情報調査室コーナー」がリニューアルしました。

<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/viewer.php?i=97>

画面構成を一新！ 登録情報量も増えました。今回は、新たにオープンした
3ページについて、ご紹介いたします。

その1：「新着資料紹介」ページ

新規受入資料の情報を一覧形式で見ることができます。一覧は、資料の種類別（センター刊行物・図書・報告書類等）・月単位となっています。

注：このページで紹介する資料は、所蔵検索システムにデータ登録される資料のみのため、データ登録されない資料（参考図書類・視聴覚資料等）はここに表示されません。お探しの資料が見当たらない場合は、情報調査室までお問い合わせください。

その2：「所蔵資料紹介」ページ

所蔵資料の紹介ページです。所蔵資料を種類別（図書・雑誌・特殊コレクション等）に分け、それぞれの種類に関する特徴を記載しています。所蔵検索システムでは検索対象外となっている「広報誌類」「視

聴覚資料」「規程集類」の所蔵資料の一覧も収録されています。

また、過去数回にわたりこの紙面を利用し、少しずつ紹介してきた「特殊コレクション」についても紙面上で紹介しきれなかった資料も含め、網羅的に紹介しています。

その3：「図書系リンク集」ページ

高等教育関連資料・情報にアクセスするための窓口として、国内外の教育関係機関がWebサイト上で提供している資料検索システム・統計・出版物等のページをとりまとめました。特徴は、提供情報の種類別にリンクをはっているため、利用したい情報に迅速にアクセスできる点です。このページは、今後も継続的に内容の充実および画面構成等の改善を行っていく予定にしています。